

万物の生命と共にあり

法話

法話4

如來の願い（本願）

能岡 浄

生き物どうしのつながり

この地球では、無数の生き物が互いに深くかかわり合って生活しています。

草木は根から吸い上げた水や肥料、日光と炭酸ガスから栄養素を作つて成長し、花や実をつけます。これを昆虫や小鳥などの小動物、鹿などの草食動物が食べます。

アフリカの草原で、ライオンなどの猛獸が獲物を襲う時の場面をテレビで見ると、残酷に思います。しかし、あれは食事風景です。襲われる獲物の鹿などは必死ですから、一生懸命に逃げ回り、なかなか捕まりません。結局、病氣やひ弱な鹿などが餌食になり、その生物種が滅びることはないのです。そして、ライオンの家族が食べ残した肉はハイエナなど他の肉食動物が食べ、さらに大空から舞い降りたハゲ鷲の群が肉を食べ尽くし、その後は昆虫や微生物が食べ、最終的に、獲物の鹿の遺骸は地中にもどされます。このような関係を食物連鎖といい、野生の動・植物の間では飽食や残飯などの「無益な殺生」は、全くありません。「この自然界に無駄な生き物は、一つもない」と仏教は説いています。

人間も自然界の生物の一員であることを認識して暮らしたのは、アイヌ民族などの狩猟の民です。彼らは、野山の生物は『恐れ多い神からの贈り物』と考え、必要な時に必要なだけの量を探り、自然界のバランスが崩れないように配慮しながらの生活でした。これは「あらゆる生き物は、私達が遠い過去から、いろいろと転生してきた、そのいずれかの時代の父母兄弟である」との親鸞聖人のお考えと、全く同じだと思います。

文明社会が自然環境を変えた

昔は、作物が育つ田畠の土に、沢山の微生物やミミズなどが堆肥を食べて分解し、柔らかい肥えた土を作っていました。根をグンと伸ばし、養分を十分に吸い上げたトマトやキュウリなどの花が咲き、多くの昆虫が蜜を求めて飛んで来て、受粉が行われ、日光を浴びて育った色の濃い、香り高い野菜ができていきました。

最近は、主に化学肥料を使うようになり、微生物やミミズなどが姿を消し、土が硬くなつて作物は根を伸ばすことができず、養分を十分に吸い上げられないのです。また品種改良も進み、促成栽培、温室育ちの野菜が出回り、味や香りが、昔に比べて変わりました。野菜には虫が食べた穴も全くありません。収穫量を上げ、消費者の要求に答えるために、多量の農薬で害虫を駆除するのです。また、都市開発で田畠や池、雑木林が姿を消しチョウやトンボなどの昆虫



や小鳥も減りました。これらの生き物にとつて自然破壊は、生きる世界を奪われ、三年前の阪神淡路大震災の被害どころではあります。また、公園や道路わきにはゴミが捨てられ、川や海には家庭排水や工業廃液が流れ込み、車の排気ガスなどで空気も汚くなりました。

如来の願い

相手（あらゆる生き物）の身になることのできるのが人間である、と仏教は説きます。人間は、如来から思考能力を頂いてますが、頭の中が煩惱で一杯の時は、人間として失格です。また、お釈迦様は「恥を知らぬものは人間ではない」と言されました。

如来の本願は「人間よ、本当の人間になつて下さい」の願いです。先師の「私達の身体も生活必需品も、この地球からの頂きもので、『生かされて、自然の法則の中に万物の生命と共にあり』と頭の下がるとき、万物の生命に育まれて來た我が身を疎かにすることと、自然の生態系を侵すことの罪に、心が痛みます」の言葉を、じっくりと噛みしめ、念佛申す日々を送るべきだと思います。

能岡 浄（よしおか きよし）

昭和十八年三月十日生まれ。大阪府立看護大学
医療技術短期大学部・臨床栄養学科助教授。農
学博士。大阪教区・願成寺住職。